

幸福度に関するデータ分析

豊田尚吾¹

1.はじめに

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（以下 CEL）は 2005 年から毎年「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査（以下、生活意識調査）」を行っている。CEL が発行する季刊誌 CEL94 号(2010 年 10 月発行予定)では、2010 年度に行った同調査の結果についての分析・考察を特集テーマとしており、拙稿「幸福に必要な条件と年齢・性別」も掲載予定である。ここでは、タイトル通り年齢、性別（特に前者）に焦点を当て、結果の分析を行っている。

これに関連して、ディスカッションペーパー（10-05）では、生活経済に関わる幸福研究についての既存の蓄積について紹介し、文献調査（展望）と位置づけた。本稿（10-06）は、季刊誌 CEL では十分に言及することのできなかつた、調査分析に関する詳細と、追加の分析に関して論ずることを目的とする。その意味では 10-05 と同様に、季刊誌 CEL94 号の論考を補完するという目的を持っている。

ただ、季刊誌 CEL94 号ではテーマである「年齢」、特に若年層に関心をあてて多くのスペースを割いたが、本稿では特にその視点にはこだわらず、多様な観点から論じていく。

以下、次節（2 節）では、今一度幸福度調査の結果についての基本を確認した後、3 節では、季刊誌 CEL94 号では紙幅の関係で省略した決定木分析の内容について追加すべき事項を論じる。4 節では、幸福を感じるための項目と実感に関する因子分析を行う。

2.幸福度と生活満足度

まず、利用するデータに関する情報を明らかにしておく。調査名は『「これからの住まいとライフスタイル」に関する生活意識調査』。調査企画は大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所、調査の実施は社団法人 中央調査社、実施時期は 2010 年 1 月～2 月、対象は日本全国、調査方法は二段階抽出法、住民基本台帳とエリアマッピングの両方の方式を利用して、調査対象者を抽出している。

留置記入依頼法を採用し、調査回答者数は 1182 人。この調査はパネル調査であるという特徴を持っている。すなわち、調査回答者に対して毎年継続して調査を依頼し、回答をいただいている。今年は新規に 392 人の方を加えたが、継続回答を依頼したのは 844 名、そのうち 790 名に回答をいただいた。

一般的な調査という観点で見れば、これは非常に高い回答率である。継続調査であるため、回答を拒否する方々はすでに調査対象から外れているのでこのようなことが起こる。他方、回答率は高いものの、答えてくださる確率の高い高齢者の割合が増えてしまった。そこで、本年調査においては若年層の回答者を増やすといった補正を行った。これに関しては、季刊誌 CEL94 号の「調査概要」をご参照いただきたい。

CEL ではこの調査の他にインターネット調査も継続して行っているが、本稿ではこの留置調査分のデータのみを利用して内容の検討を行うこととする。

¹ 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL） 主席研究員

(1) 幸福度に関する基礎的データ

「全般的にみて、現在あなたは幸せですか」という質問を行った。それに対する回答は、図1の通りである。『とても幸せ』～『どちらかといえば幸せ』を合計した『幸せ』は、1179人の回答者（欠損値があるため、全回答者数の1182人にはならない）のうち960人も占めている。逆に、『とても不幸せ』～『どちらかといえば不幸せ』の合計は56人に止まる。現在の与党は「最小不幸社会」を目指すと宣言しているが、それはかなりの程度、実現しているのかもしれない。

ただし、調査に関して注意しなければならないことがある。果たしてこの回答が“現実”を正しく反映しているかどうか、ということである。実際、アンケートに回答するか否かは本人の自由なわけであるから、非常に不幸な人は、そのような依頼に対して応諾しない確率が高いかもしれない。そのような場合、明らかにアンケートの結果は現実（ここでは日本全体の幸福度）を表していない、ということになる。他にもこのようなアンケート調査の結果に関しては、注意点があるが、幸福度のような客観的な検証ができない、抽象的、主観的な質問に対しては特にその点、配慮が必要である。

とはいえ、本稿ではこのデータを尊重して議論を進めざるを得ない。そこで興味を引くのが、生活満足度との比較である。「今現在のあなたの生活満足度についてお聞かせください」という質問に対し、『非常に満足』～『非常に不満』と、幸福度と同じ7段階の選択肢で回答を求めた。その結果が図2である。

一見、同じような質問であり、並べてたずねた両質問であるが、回答の分布はかなり異なっている。明らかに生活満足度よりも幸福度のほうが水準は高い。これに関する考察は、季刊誌 CEL94 号「幸福に必要な条件と年齢・性別」で論じているので、そちらをご参照いただきたい。

因みに、幸福度に関しては今年初めて調査したのであるが、生活満足度に関しては、平成17年（2005年）から、毎年継続して質問項目の中に入れていた。その推移は、表1のようになっている。2005年はまだかなり不況感が残っており、2006年以降、徐々に景気回復傾向を示したのと並行して生活満足度も向上していった。

2008年をピークに再び生活満足度が下降してきていることも明確に現れている。

これから考えて、やはり生活満足度は景気の動きにある程度連動していると考えてよいであろう。2008年秋にリーマンショックが発生し、一時は百年に一度の大不況と評価されたが、生活満足度の推移だけで見ると、2005年や2006年よりは2010年（平成22年）の方がまだ状況がよいことがわかる。と

とはいえ満足の合計値は69.5%から61.1%へ1年で8.4%も大幅に下降しており、その幅は2006年から2007年にかけての満足度の上昇（8.5%）とほぼ同じ大きさとなっている。その意味ではやは

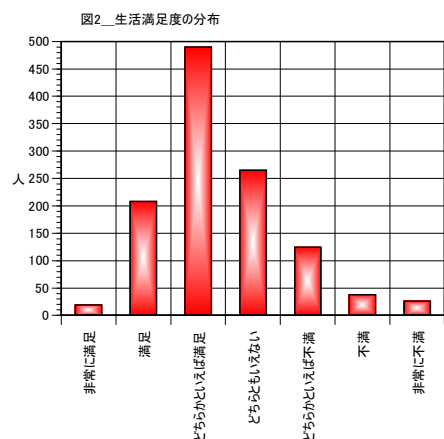
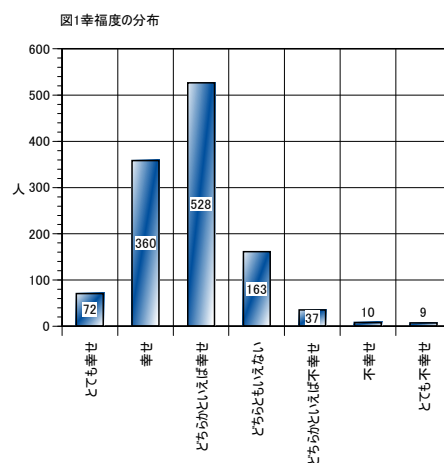


表1 生活満足度の推移

	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年
非常に満足	1.6	1.7	3.6	4.6	3.4	1.7
満足	13.9	12.4	21.3	28.2	21.0	17.7
どちらかといえば満足	42.7	44.2	42.1	37.6	45.1	41.7
満足(小計)	58.2	58.4	66.9	70.4	69.5	61.1
どちらともいえない	29.5	24.0	20.1	17.3	15.8	22.6
どちらかといえば不満	8.2	11.8	7.8	8.3	9.9	10.7
不満	3.2	4.5	3.1	2.6	3.2	3.3
非常に不満	0.9	1.3	2.0	1.4	1.6	2.3
不満(小計)	12.3	17.6	12.9	12.3	14.7	16.3

り大きな動きであることは間違いなかったようである。

ただし、冒頭で述べたように、今回の調査は若年層を大幅に増やしている。一般に高齢層の方が生活満足度を高く評価する傾向があるため、その影響が強くて、変化が緩和されているのかもしれない。その点には注意が必要である（厳密にいうと、若年層もやや生活満足度は高く、中年層の満足度が低く出ることが多い）。

したがって、今年新規に回答して下さった方々を除いた、去年の回答者だけを抽出してみるとそれぞれ以下のようになった。『非常に満足』1.3%、『満足』17.3%、『どちらかといえば満足』41.8%、『どちらともいえない』23.5%、『どちらかといえば不満』10.5%、『不満』3.8%、『非常に不満』1.8%。このように、『非常に満足』が0.4%だけ下がって、調査期間中の6年間の中でもっとも低くなっている。しかし、他はそれほど目立った変化はないため、回答者属性のバイアスはそれほど大きくはないと考えた。

(2) 幸福度と回答者の生活

季刊誌 CEL94 号「幸福に必要な条件と年齢・性別」ではタイトルどおり、年齢・性別と幸福度の関係について詳しく論じているが、その他の回答者の属性とは関連付けて検討していない。そこでいくつかの属性情報との関係を見てみた。たとえば、未婚、既婚と幸福度に関しては、既婚者の幸福度の方が多少高いものの、統計的に有意というほどの差は確認できなかった。

一方、職業との関係を見ると、分類が細かいので、明確なことは言いにくいものの、比較的幸福度が高かったのは、「学生」、「専業主婦」で、逆に低かったのは「労務・販売職」、「無職」などであった。「自由業」は分散が大きかった。

では、様々な生活との係わり合いはどうであろう。食生活と幸福度との関係を見ると、強い相関が確認できる。ただ、食生活が『満足』であったとしても、その40%以上は『とても幸せ』や『幸せ』ではなく、『どちらかといえば幸せ』を選んでいる。当然のことではあるものの、食生活の満足は幸せの十分条件にはなっていない。

「生活しているまちが好き」かどうかを問う、地域生活とのかかわりでも、幸福度と非常に強い有意性が検出された。これらは常識的な結果といえるだろう。

一方、自由時間の有無については興味深い結果が得られた。それが表2である。これをみると自由時間が『ほとんどない』場合、『とても幸せ』と回答する割合が最も高いという結果になった。『幸せ』と回答する割合も、自由時間が『充分ある』と答えた回答者とあまり異ならない。

表2 自由時間の有無と幸福度

		上段:人数 下段%						合計	
自由時間		とても幸せ	幸せ	どちらかといえば幸せ	どちらともいえない	どちらかといえば不幸せ	不幸せ	とても不幸せ	
充分ある	人数	18	104	130	30	7	1	4	294
	%	6.1	35.4	44.2	10.2	2.4	0.3	1.4	100
ある程度ある	人数	29	163	271	72	15	7	4	561
	%	5.2	29.1	48.3	12.8	2.7	1.2	0.7	100
あまりない	人数	17	66	103	46	10	1		243
	%	7.0	27.2	42.4	18.9	4.1	0.4		100
ほとんどない	人数	8	27	21	15	5	1	1	78
	%	10.3	34.6	26.9	19.2	6.4	1.3	1.3	100
合計	人数	72	360	525	163	37	10	9	1176
	%	6.1	30.6	44.6	13.9	3.1	0.9	0.8	100

ところが、『どちらともいえない』～『とても不幸せ』という割合も高くなっている（すなわち『どちらかといえば幸せ』と回答する割合が、非常に少ないということになる）。このように、忙しさは文字通り「自由」に対する障害という意味で、幸せを減じる要因になる。一方で、その忙しさが仕事や家庭などにおける、自らの役割の全うにつながっていれば、より大きな満足感を得ることにつながるのであろう。そのような、忙しさの質によって、幸福度が二極化したのではないだろうか。

事前には、自由時間があるほど幸福度は高いと予想していたのであるが、結果は必ずしもそのよ

うなものではなかった。そう考えると、自由時間があればよいというものではないようだ。(ただし、自由時間が『ほとんどない』という回答は 1176 人中、78 人と 7%程度しか占めていないため、表 2 のような構成比が頑健な結果であるかどうかの判断については留保が必要かもしれない)。

とはいえ、自由時間が『ある程度はある』という中庸の回答者の幸福度が高いわけでもない。時間は自己実現に大きく影響していると思われるが、それがちょうどまい具合にバランスしている状態というのはなかなか難しいのではないかという示唆が得られる。

他にも、「あなたは環境に配慮した生活を送っていると思うか」という質問と幸福度にも正の相関が確認された。これも幸せだから、環境に配慮する余裕があるのか(幸せ→環境配慮という因果関係)、環境に配慮した生活を通じて啓発され、幸福感を感じるのか(環境配慮→幸せという因果関係)、それとも他者配慮というその人の個性(パーソナリティ)が、自らを環境配慮生活に促すとともに、幸せを感じやすい価値観を醸成しているのか(パーソナリティ→環境配慮、パーソナリティ→幸せという、因果関係はないが共変関係にあるという構造)、いずれかは定かではない。

ただ、「温室効果ガス 25%の削減は可能だと思うか」という質問に対し、楽観的であるほど幸福度が高いという関係は見られなかったので、パーソナリティ説はあまり説得的ではないかもしれない。

では、生活に対する不安の感じ方と、幸福度はどのような関係になっているであろうか。『食材の品質』、『物価の水準』などいくつかの生活リスクに対して「この1年で不安が増したか」という聞き方で不安の“変化”について聞いているデータがあるので、それとの関係をみた。

その結果、不安が小さいほど幸福度が高いという結果となったのは、『物価の水準』、『地域医療制度の健全性』、『収入、日々のやりくり』、『貧困に陥る懸念』であった。一方で『治安』や『健全な地域社会』といったものとの相関は見られなかった。幸福度に直結する不安はやはり経済面でのそれのようである。だからこそ、経済面での施策が重要であるとの論理にもつながるかもしれないが、一方では経済要因に幸せ感が縛られすぎている現状に問題はないか、といった問題意識に発展させる可能性もあると考える。

以上、幸福度と他の調査項目の関係をいくつかみてきた。やはり、幸福と並行していそうな項目については、予想と違わないという結果を得ることができた。一方で、自由な時間と幸福度の関係では、自由とは何かということを考えさせる結果となった。

3.幸福度の決定木分析

(1) 季刊誌 CEL94 号の要約

季刊誌 CEL94 号「幸福に必要な条件と年齢・性別」では幸福度と幸福の条件について、決定木分析を行っている。すなわち、どのような幸福条件を満たしている人が、結果として幸福を感じているのかを、幸福度のデータ、幸福を感じる条件に対する自己評価のデータを用いて、決定木分析を行った。

ここでは幸福を感じる条件を 11 設定(表 3)している。これらに対し、各回答者が『非常に満足』～『非常に不満』までの 7 段階評価を提供してくれている。その結果を用いて、どのような条件を満たしていると、結果としてより高い幸福感を得ているかを検討した。

表3 幸福感を感じるために重要だと思うもの

自分自身の健康が良好である (あるいはよい方向に向かっている。以下同じ)
家族・知人の健康が良好である
お金がある
よい家庭が築けている
近隣との関係が良好である
友人関係が良好である
仕事での人間関係が良好である
社会から評価されている
よい社会だと納得できる
自分自身がこうありたいと思っているような自分である※
自分の大切だと思っている人が幸せである
※自分が成長している、何かを成し遂げた、成し遂げようとしているという実感も含む

まずは全体分析、次に年齢階層別（30代以下と40代以上）、最後に男女別に分析を行った。その検討結果は季刊誌 CEL にて論じているが、紙幅の都合でそれぞれの樹形図を提示していない。加えて男女別の結果に関しては結果表のみで、ごくわずかなコメントしか加えていない。

したがって、本節ではその不足部分を補うこととしたい。まず、樹形図であるが、大きな図となるので、文末にまとめて掲示する。その意味するところについては、季刊誌 CEL94 号で詳しく論じているので、そちらか本稿文末（10 ページ）の「決定木分析－全体」の図と表を対応させることでご理解いただきたい。

全員を母集団として分析を行った場合、「よい家庭が築けているか」どうか、もっとも幸福度を予測するために有効な条件となり、以下、幸福度が比較的高い回答者に対しては「自分自身がこうありたいと思っているような自分である」や「お金がある」がそれに続く条件となる。比較的幸福度が低い回答者に対しては「自分自身の健康（状態）が良好である」や「家族知人の健康（状態）が良好である」が説明力の高い変数となる。

一方、年齢階層別に見た場合（全体分析と同様に、季刊誌 CEL94 号または文末 11 ページ「決定木分析－年齢階層別」参照）、若年層（30代以下）は「自分の大切だと思っている人が幸せである」および「よい家庭が築けている」の 2 つで 7 つのグループに分けることができる。高年齢層（40代以上）はやや複雑で、「よい家庭が築けている」が第一条件となり、次に「社会から評価されている」が、第三に「自分自身がこうありたいと思っているような自分である」が幸福度上位グループの分類項目となった。一方、幸福度下位グループではやはり、「自分自身の健康（状態）が良好である」や「家族知人の健康（状態）が良好である」が重要となっている。

(2) 男女別結果詳細

一方、男女別の結果については、季刊誌 CEL94 号ではほとんど触れていないので、ここで少し詳しく説明を行う。結果は表 4 の通りとなっている（季刊誌 CEL94 号「幸福に必要な条件と年齢・性別」表 6 の再掲）。

まず女性において、最初の条件となるのはやはり「よい家庭が築けている」という条件である。まずこの回答によって、『とても実感できている』、『まあ実感できている』、『どちらともいえない+あまり実感できていない』、『まったく実感できていない』の 4 グループに分けることができる。

表 4（上表）の上位グループ（グループ 1,2）に対しては、

表4 幸福度の決定木分析(男女別)

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない+あまり実感できていない	どちらともいえない+あまり実感できていない	全く実感できていない
年齢	40代以下	50代以上	-	-	-	-	-
お金がある	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-
大切な人が幸せ	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-
人数	41	24	84	239	65	113	21
幸福度平均値	6.17	5.58	5.81	5.37	5.26	4.64	3.67
分散値	0.49	0.49	0.44	0.49	0.59	0.73	1.27
順位	(2)	(6)	(3)	(7)	(9)	(13)	(15)

	グループ1'	グループ2'	グループ3'	グループ4'	グループ5'	グループ6'	グループ7'	グループ8'	グループ9'
性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	実感できている	実感できていない
こうありたい自分	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-	-	-	-	-
お金がある	-	-	実感できている	どちらともいえない	実感できていない	-	-	-	-
自分の健康	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-
家族知人の健康	-	-	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない
人数	23	34	60	231	39	73	55	35	42
幸福度平均値	6.22	5.59	5.58	5.26	4.72	4.97	4.38	4.80	3.67
分散値	0.43	1.01	0.48	0.52	1.38	0.71	1.15	1.30	1.41
順位	(1)	(4)	(5)	(8)	(12)	(10)	(14)	(11)	(16)

さらに「年齢」で分類することが効果的であるという結果となった。具体的には 40 代以下のほうが、50 代以上よりも幸福度が高いということになる。結果、上記の 2 条件を満たす 41 人がもっとも幸福度の高いグループとなり、『とても幸せである』=7 点～『とても不幸せである』=1 点とした場合の平均値は 6.17 となる。

「よい家庭」条件で『まあ実感できている』と回答したグループ 3,4 に対しては「お金がある」かどうかは幸福度に大きく影響するということがわかった。同様に、「よい家庭」条件で『どちらともいえない』と回答したグループ 5,6,7 に対しては「自分の大切だと思っている人が幸せである」という項目が説明力を持っていることがわかった。

表 4 (上表) をみてもわかるように、最初の「よい家庭」条件でよりよい評価をしても、次の条件によっては幸福度の平均値が逆転することがある。結果的に 7 つのグループに分類し、幸福度の計算値は 6.17～3.67 と大きくひらいた。「よい家庭」条件で『まったく実感できない』と回答した、幸福とはいえないグループ 7 は、その回答だけで、他のどのグループよりも幸福度の平均値が低いという結果になった。

一方、男性については表 4 (下表) を参照していただきたい。ここでも最初の条件として相当であるのは「よい家庭が築けている」である。男性は『とても実感できている』、『まあ実感できている』、『どちらともいえない』、『実感できていない (あまり実感できていない+まったく実感できていない)』の 4 つに分類された。

「よい家庭」条件が『とても実感できている』と回答した場合には、次には「自分自身がこうありたいと思っているような自分である」という自己実現欲求が抽出できた。この条件に対して『実感できている (とても実感できている+まあ実感できている)』と回答したグループ 1' の 23 名が男性でもっとも幸福度の高いグループとなり、その幸福度平均値は 6.22 である。これはわずかではあるものの、女性のもっとも幸福度の高いグループ 1 をしのぐ。

「よい家庭」条件が『まあ実感できている』と回答したグループ 3',4',5' に対しては上位グループと異なり、『お金がある』かどうかは次の条件となった。これは女性の分析においても見られた現象である。同様に、「よい家庭条件」で芳しくない回答をしたグループの次の条件は、「自分自身の健康 (状態) が良好である」であったり「家族知人の健康 (状態) が良好である」であったりしている。

(3) 決定木分析考察

以上、全体、年齢別、男女別に幸福度を判別するための決定木分析を行ってきた。その結果、3 つの分析に共通するものが見えてきたように思う。ただ、注意すべきなのは、今取り上げた条件さえ満たしていれば、他の条件はどうでもいいわけではないということだ。

季刊誌 CEL94 号でも言及しているが、どの分析でもはじめに出てくる「よい家庭が築けている」という条件は健康やお金の状況とも関係している。つまり、よい家庭が築けているという条件に肯定的な回答をしている場合には、健康も良好で、お金にも不満がないことが多い。その他の条件とも正の相関関係が多く確認できる。

考えてみれば、自分や家族の健康状況が悪い場合や、お金がないのによい家庭だという評価はしにくいであろう。その意味で、最初に出てくる条件としての「よい家庭が築けている」かどうかというのは、生活全般に関する、総合評価の代替指標といえるのではないか。唯一、年齢階層別の若年者においては「よい家庭」条件が二番手に位置づけているが、それは独身者が多いためであろう。

したがって、「よい家庭」条件を総合評価と仮定すると、その他の条件が、各グループに特徴的な要因としてとらえられる。若年層では「自分の大切だと思っている人が幸せである」と「家族」要因だけで分類が可能である。つまり、30代以下（39歳以下）では、人生の基礎となる「誰とともに生きていくか」の模索期であることがうかがわれる。

一方、40歳以上になると、総合的幸福度の高い集団では「社会から評価」や「こうありたい自分」といった、自己というものをどう確立していくかということに幸福度が左右されている状況が垣間見える。一方、幸福度の低いグループではやはり、健康という衛生要因が満たされないことが幸福実感の障害となっていることがわかる。高年齢になるほど、健康問題はより切実になっていくことは自然であり、中高年の幸せについて考えるとき、健康（と自己の確立）という要因は見逃せない項目になることが示唆されている。

男女という性別で見たときの結果も興味深い。女性において、総合指標としての「家族」条件をクリアした幸福度上位層の次の条件が「年齢」であり、かつ若いほど幸福だという統計上の結果には考えさせられる。ただ、それは全女性の1割程度の人のお話であり、一般論にまで広げることは慎まなければならない。総合条件において『まずまず』のグループでは「お金」が条件になっており、女性における若さとお金という、非常に現実的な幸せ像が見られる。

一方、「家族」という、総合条件があまり芳しくないグループの次の条件は「大切な人が幸せ」という愛情にかかわるもので、少しほっとさせられる。とはいえ、「よい家族」条件で低く自己評価している人の中で、愛情状態の現状はよいとは言えない回答者が113名、つまり全女性の2割程度も占めるという現実がある。

男性に関しては、総合評価上位層に関しては「こうありたい自分」要因で自己実現に目が向いており、総合評価中位層では女性同様「お金」という現実問題が浮上する。総合評価下位層では自分や家族の健康が重要な鍵を握る。その結果、母集団を限定せず、全体を決定木で分析した場合とほぼ同じ分類が実現していることになった。

これらのことから総合すると、やはり、どのような場合でも自分や家族に健康上の問題がある場合には、幸福度が一気に下がってしまうことが分かる。ある意味では健康は幸せのための絶対的必要条件である。その意味では政府の言う「最小不幸社会」を考える場合には、やはりより多くの人に健康を、ということがポイントになるように思う。

健康という条件がある程度満たされれば、次はお金という現実が目に行くこともよく理解できる結果である。そして、こうありたい自分、といった自己実現を追及するのは、限られた幸せな人たちだということが、この決定木分析からは見えてくる。

現実的といってしまうえばそれまでではあるものの、そこに現在の社会が抱える問題も現れているように思える。卑近なキーワードでいえば、いわゆるお金第一主義の弊害ということになってしまふのかもしれない。しかし、この問題は非常に根の深いものであるため、ここではそのような問題意識を提示することにとどめておく。

4 幸福度条件と実感の因子分析

(1) 幸福度条件の因子分析

前節で「よい家庭」条件は他の条件と相関しているとし、幸福度の総合指標といえるのではないかと述べた。では実際に、それぞれの指標はどのような関係にあるのだろうか。そこで幸福のための条件に関して、その背後に何か条件をコントロールする「因子」が存在するのではないかと問

題意識から、探索的因子分析を行い、検討の材料とした。

その結果が表 5 である。これによれば、ある条件（固有値 1 以上）のもとで 5 つの因子が抽出された。第 1 因子は「お金」因子であり、他の幸せとは一線を画す、独立した因子の存在を示唆している。

第 2 因子は「よい家庭が築けている」を中心に、「自分自身がこうありたいと思っっているような自分である」「近隣との関係が良好である」が関係の深い因子となっている。ただし、ここで注意しなければならないのは「こうありたい自分」指標は、この因子とは負の関係にあるということだ。つまり、よい家庭で近隣との関係もよい、つまり身近な生活の充足を重視する場合には、自己実現という、個人の満足を追求することはあきらめがちになる。自己の周辺重視因子は逆に言えば、自己実現軽視因子でもある。ただし、負の関係とい

っても実際の数値は-0.38 と大きくはないので、自己実現軽視というのはいいすぎだ。あくまでややその傾向が見られるという程度である。

ただ、あれもこれもというわけに行かないのも人生である。それから考えると、あながちおかしな結果とはいえないのであろう。

第 3 因子は「家族・知人の健康が良好である」と「よい社会だと納得できる」からなるが、これ

も両者の符合は異なる。ただ、家族の健康と、よい社会の負の関係を因子として捉えることは簡単ではない。あえていえば、家族・知人が健康であることに重きを置く人は、あまり社会全体のことについて思いをいたさない、やや近視眼的な性向があるということになるだろうか。

ただ、「よい社会」指標の因子負荷量は 0.16 と非常に小さいので、あえて重視する必要はないと思われる。すなわち、第 3 因子は、家族や知人の健康配慮因子（ただし符号はマイナス）ということとよい。

第 4 因子も「自分自身の健康が良好である」と「自分の大切だと思っている人が幸せである」からなり、符号が逆転している。これもやや名前は付けにくいだが、基本的には自己の健康を重視する回答者は、他者に対する配慮にまでは意識が及んでいないことが示されている。ただ、これも決して強い関係とはいえない。

本来は第 3 因子と第 4 因子が総合されたような因子を持っているとわかりやすい構造になっていた。しかし、結果から見ると、健康で一くくりにすることは適当ではなく、生活者の判断では、あくまで自分と他者は区別していることがわかる。

最後の第 5 因子は「仕事での人間関係が良好である」「友人関係が良好である」「社会から評価されている」からなり、自分を取り巻くセミプライベートなコミュニティとの良好な関係を表しているという点ではわかりやすい。

(2) 幸福条件充足感（実感）の因子分析

以上は回答者が幸せの条件として、何を重視しているかというデータの背後にある因子を探るものであった。一方、このような条件に対する自己評価（実感）のデータもあることは前節でも述べた。では、自身の実感（評価）に何か回答者の心の中にある因子が影響しているのであろうか。それをみるために、実感に関しても探索的な因子分析を行った。それが表 6（次ページ）である。こ

表5 幸せの条件因子分析

	因子				
	1	2	3	4	5
お金がある	0.93	-0.05	0.08	-0.01	0.01
よい家庭	-0.09	0.81	-0.04	-0.13	-0.18
こうありたい自分	-0.25	-0.38	0.32	-0.14	-0.14
近隣関係	0.00	0.33	0.03	0.14	0.30
家族知人の健康	-0.08	-0.01	-0.74	0.10	-0.11
よい社会	-0.02	-0.01	0.16	-0.08	-0.06
自分の健康	-0.03	-0.05	-0.22	0.79	-0.12
大切な人が幸せ	-0.30	-0.18	0.23	-0.37	-0.32
仕事の人間関係	-0.02	0.02	-0.01	-0.06	0.54
友人関係	0.03	-0.01	-0.01	0.01	0.32
社会から評価	0.06	-0.10	0.30	-0.03	0.30

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

では因子は3つ抽出されている。

第一の因子は、「家族・知人の健康が良好である」「自分自身の健康が良好である」「自分の大切だと思っている人が幸せである」「よい家庭が築けている」そして「お金がある」からなる。健康、家庭、お金という基本的な幸福感を網羅した因子といえる。

第2因子は「社会から評価されている」「自分自身がこうありたいと思っているような自分である」「よい社会だと納得できる」という、プラスαの幸せ因子が集まっている。

第3因子は「友人関係が良好である」「仕事での人間関係が良好である」「近隣との関係が良好である」という、人間関係を表す指標からなる因子である。

事前の幸福の条件評価から探索的に因子を探った場合には、ところどころ整合的とは思にくい因子が抽出された。一方で実際の自己評価においては、幸せの基本条件、より高度（贅沢）な幸福、人間関係・コミュニケーションといった因子が評価に影響している可能性を示唆するという、比較的分かりやすい結果となった。

最後に

以上、基本的な幸福度データの確認を行ったうえで、季刊誌 CEL94 号では省略せざるを得なかった幸福度を分類（予測）するための決定木分析の結果を柱に論じた。最後に幸福条件の重要度と実際の実感に関して因子分析を行うことで、その背後に何か因子が存在している可能性を探った。

結果として、幸福の実感の現実について、いくつか事実を発見することができた。これは新たな問題意識として、一層の検討の出発点になる。今回は留置調査のデータを用いたが、CEL ではインターネットの調査も行っており、留置調査と同じ質問を行ったデータもある。そのような情報も利用しつつ、幸福度に関する検討を積み重ねていきたいと考えている。

以上

(2010年9月28日)

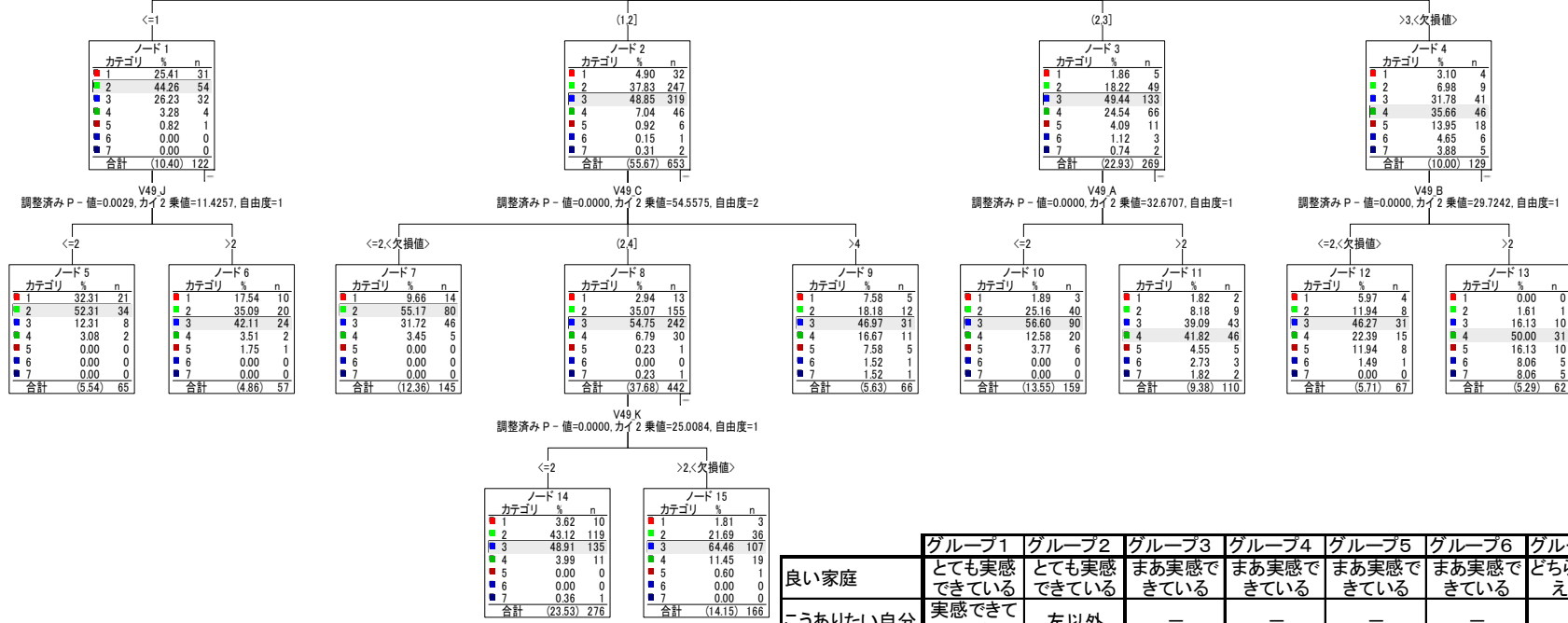
※次ページ以降に「決定木分析の結果」を掲載しているが、これは統計解析ソフト「Answer Tree」（SPSS社）を利用したアウトプットである。従って、分類などが記号で示されている。その点分かりにくい図となっているが、内容については右下にある表と対応させてご覧いただきたい。

表6 条件実感の因子分析

	因子		
	1	2	3
家族知人の健康	0.60	0.08	0.16
自分の健康	0.54	0.12	0.14
大切な人が幸せ	0.51	0.25	0.24
よい家庭	0.49	0.19	0.28
お金がある	0.44	0.33	-0.01
社会から評価	0.09	0.70	0.33
こうありたい自分	0.36	0.56	0.11
よい社会	0.20	0.56	0.10
友人関係	0.24	0.01	0.73
仕事の人間関係	0.05	0.29	0.54
近隣関係	0.25	0.17	0.44

V46		
ノード	カテゴリ	% n
ノード0	1	6.14 72
	2	30.61 359
	3	44.76 525
	4	13.81 162
	5	3.07 36
	6	0.85 10
	7	0.77 9
合計	(100.00) 1173	

V49 D 調整済み P-値=0.0000, カイ2乗値=273.5156, 自由度=3



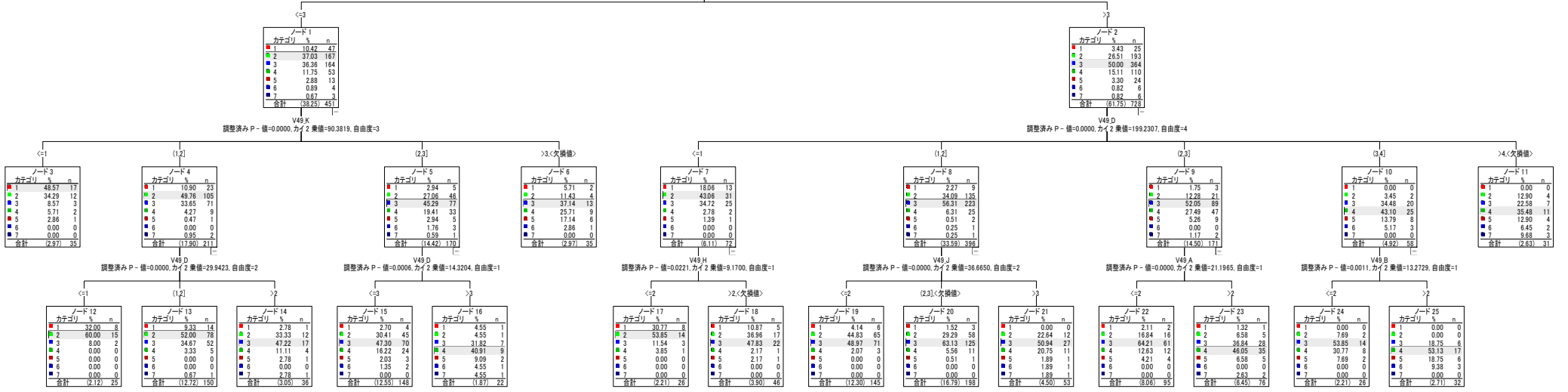
決定木分析ー全体

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7	グループ8	グループ9	グループ10
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	実感できていない	実感できていない
こうありたい自分	実感できている	左以外	—	—	—	—	—	—	—	—
お金がある	—	—	実感できている	どちらともいえない+あまり実感できていない	どちらともいえない+あまり実感できていない	全く実感できていない	—	—	—	—
自分の健康	—	—	—	—	—	—	実感できている	左以外	—	—
家族知人の健康	—	—	—	—	—	—	—	—	実感できている	左以外
人数※	65	57	149	276	166	66	159	110	67	62
幸福度平均値	6.1	5.6	5.7	5.4	5.1	4.9	5.1	4.5	4.7	3.6
分散値	0.6	0.8	0.5	0.5	0.4	1.3	0.6	1.0	1.1	1.3
順位	①	③	②	④	⑤	⑦	⑥	⑨	⑧	⑩

※ 欠損値(無回答)があるため、合計は1182人にならない

ノード0	ノード0	n
1	カテゴリー	411 72
2	カテゴリー	3053 360
3	カテゴリー	4478 528
4	カテゴリー	1283 160
5	カテゴリー	314 37
6	カテゴリー	685 10
7	カテゴリー	078 9
合計		11007 1172

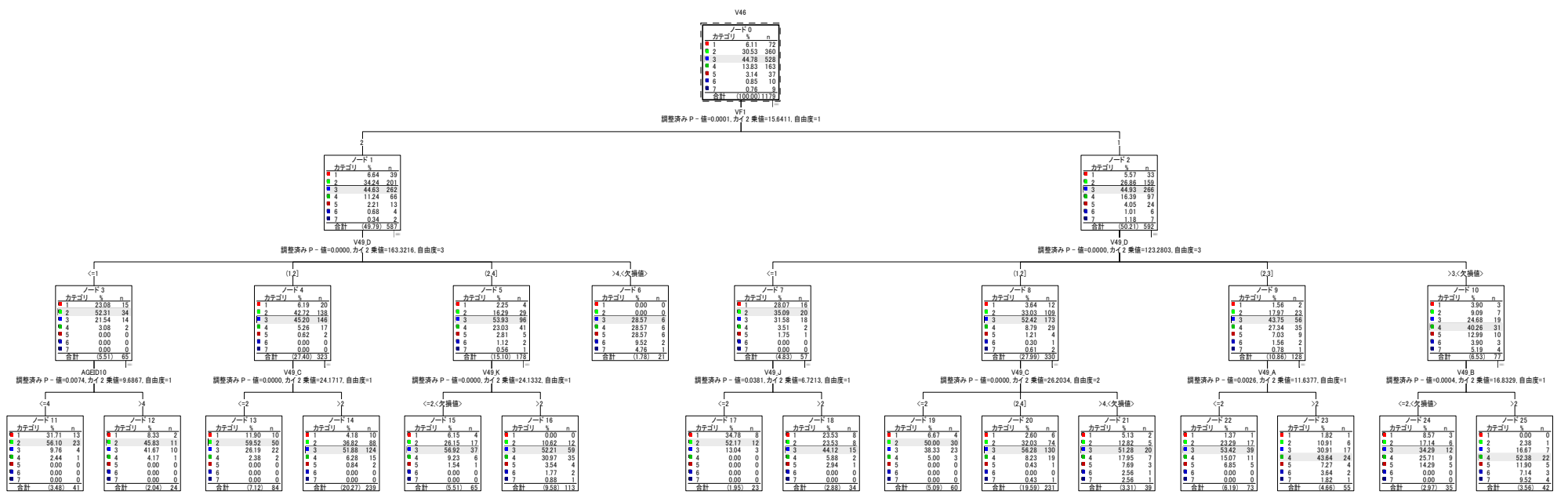
AGE10
調整済み P-値=0.0000, カイ2乗乗値=24.9243, 自由度=1



	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
年齢	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下
大切な人が幸せ	とても実感できている	実感できている	実感できている	実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	実感できていない
良い家庭	-	とても実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない+あまり実感できていない	実感できている+どちらともいえない	実感できていない	-
人数※	35	25	150	36	148	22	35
幸福度平均値	6.20	6.24	5.65	5.11	5.11	4.23	4.54
分散値	1.02	0.34	0.62	1.10	0.76	1.54	1.33
順位	(2)	(1)	(4)	(9)	(8)	(15)	(13)

	グループ1'	グループ2'	グループ3'	グループ4'	グループ5'	グループ6'	グループ7'	グループ8'	グループ9'	グループ10'
年齢	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	あまり実感できていない	あまり実感できていない	全く実感できていない
社会から評価	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-	-	-	-	-	-
こうありたい自分	-	-	実感できている	どちらともいえない	実感できていない	-	-	-	-	-
自分の健康	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-
家族と人の健康	-	-	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-
人数※	26	46	145	198	53	95	76	26	32	31
幸福度平均値	6.12	5.52	5.51	5.26	4.85	5.00	4.39	4.62	3.81	3.94
分散値	0.56	0.64	0.37	0.36	0.96	0.55	0.90	0.54	0.71	2.00
順位	(3)	(5)	(6)	(7)	(11)	(10)	(14)	(12)	(17)	(16)

決定木分析一年齢階層別



性別	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない+あまり実感できていない	どちらともいえない+あまり実感できていない	全く実感できていない
年齢	40代以下	50代以上	-	-	-	-	-
お金がある	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-
大切な人が幸せ	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-
人数	41	24	84	239	65	113	21
幸福度平均値	6.17	5.58	5.81	5.37	5.26	4.64	3.67
分散値	0.48	0.49	0.44	0.49	0.59	0.73	1.27
順位	(2)	(6)	(3)	(7)	(9)	(13)	(15)

決定木分析ー男女別

性別	グループ1'	グループ2'	グループ3'	グループ4'	グループ5'	グループ6'	グループ7'	グループ8'	グループ9'
良い家庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	実感できていない	実感できていない
こうありたい自分	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-	-	-	-	-	-
お金がある	-	-	実感できている	どちらともいえない	実感できていない	-	-	-	-
自分の健康	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない	-	-
家族知人の健康	-	-	-	-	-	-	-	実感できている	どちらともいえない+実感できていない
人数	23	34	60	231	39	73	55	35	42
幸福度平均値	6.22	5.59	5.58	5.26	4.72	4.97	4.38	4.80	3.67
分散値	0.43	1.01	0.48	0.52	1.38	0.71	1.15	1.30	1.41
順位	(1)	(4)	(5)	(8)	(12)	(10)	(14)	(11)	(16)